

3年目の保育士によるクラス担任としての子どもの見方

The Viewpoints about Children by the Homeroom Teacher Who Has Been a Nurse for Three years

幼児保育学科 寺島 明子
Akiko TERASHIMA

幼児保育学科 大野 和男
Kazuo OHNO

保育士 青柳 静花
Shizuka AOYAGI

保育士 横山 いずみ
Izumi YOKOYAMA

本研究は、寺島ら(2009)に引き続き、短大を卒業して3年目の学生がどのような経過で保育の専門職者に育っていくのかについて検討した。3歳児クラス担任のA保育士を対象とし、毎月1か月の保育の状況を振り返ってもらい、その内容を検討した。

A保育士は、3歳児の子どもの姿を観てそれに合った保育を行なっているわけではなかった。3歳児を担当した時に、子どもの好む遊びを中心に保育をしていこうと願いつつ、保育園の行事活動と同年齢クラス活動を中心におきながら、活動ができたことに視点を置き、自分ひとりで考えながら日々保育をしていたことが推測された。

A保育士が、子どもに真心を持って一生懸命に向かっていった思いが子どもの心に届き、その結果両者の信頼関係が構築でき、子どもたちは成長発達しているように思われた。

【キーワード】 保育士3年目・保育園の行事活動・クラス保育・子どもの成長発達

1. 問題:新人保育士が専門職者となっていくこと

新保育所保育指針は、「子どもたちをとりまく環境問題やさまざまな社会的変化」¹⁾に伴い「子育て家庭における養護や教育の環境としての条件を乏しくさせることになり、結果的に子育て家庭の養育力の低下を危ぶむような状況を発生させ」²⁾たことを背景に、2009年4月1日に施行された。また、保育の計画の編成を「保育計画」から「保育課程」へ改定させ、「保育所における保育の基本は、子どもの主体性を尊重し、子ども自らが環境に関わり、環境との相互作用を通して多様な体験をすることで、子どもが心身共に健やかに育つこと」³⁾であると記載している。その時に保育士の役割として大切なことは、「子どもが発達に必要な体験を積み重ねていくことができる環境を計画的に構成し、子どもの心身の状況により適切な援助をすること」⁴⁾であると提示している。

本校では、こういった保育所保育指針を始め、様々な科目を学び卒業していく。そして、卒業生は、保育現場へ就職していくことが多い。特に、就職した初年度は、未満児クラスの複数担任や障害児の加配保育士で配属されることが多い。

今回研究対象のA保育士も、未満児クラスの複数担任を2年経験し、その後初めてクラス担任をしたのである。このようなクラス編成の中でA保育士は、果たしてどのような過程を経て子どもたちと関わり、

どのように援助し成長発達させていくのであろうか。本研究対象のA保育士に限らず、新人でも保育士になった以上、上記のように一人ひとりの子どもを見取り、指導計画を立て、支援をして成長発達をさせなければならない。しかし、その子どもたちの成長発達を援助していくのには、保育の質の技術や知識を身につけ、積極的に子どもたちとの信頼関係を構築していくことが必要となる。

そこで、保育園へ就職した3年目のA保育士は、子どもをどのように捉え、どのようにかわり援助していくのかを検討することとした。寺島(2008)らは、新人保育士に影響を与えていることとして先輩保育士の存在を挙げている。先輩保育士が新人保育士に対して、新人保育士が頑張っていることを認めつつ、こうすればもっとうまく行くという肯定的な言い方で援助していくことで成長していくことも明らかにした。¹⁾

しかし、保育現場ではそのような職場環境が保育園で備わっているとは限らない。つまり、先輩保育士と新人保育士がフレンドリーに話す環境が構築されていないことが多いと思われる。また、新人保育士は先輩保育士に気を使い、自分の考えていることを自由に発言することはできないのではないかとと思われる。

また荘司(2009)は、「子どもを育てるという重責を負う保育者にとって、特に新人保育者にとっては、

気軽に自分の保育を語れる場や悩みを相談できる場が必要である」ことを挙げているが、その環境は新人保育士にとっては設定されていない場合が多いことが推測される。

新人保育士の成長は、先輩保育士からのアドバイスや気づきを得て、保育を振り返ることができるようになり、その結果自分自身の保育の考えや思いを構築していくことができるのであろう。つまり保育士が育つためには、先輩保育士が新人保育士に積極的に寄り添い、新人保育士が頑張っているところを認めながら、肯定的な話し方で保育を行なっていくように援助することが大切であると言えよう。²⁾

そのことについて望月(2009)も保育力やチーム力を高めるためには、子どもの側に立ち、どんなことを大事に保育すべきかを共通認識しなければならないと述べている。つまり新任保育士と他の保育士との意見交流の場は、保育の質を高めるために非常に重要であると総括しているのである。³⁾

また寒河江(2005)は、新任保育士の特徴としてバンダー＝ヴェンの5段階モデルを参考に研究を行っている。5段階とは、「段階1:素人・新任の段階、段階2:初任の段階、段階3:洗練された段階、段階4:複雑な経験に対処できる段階、段階5:影響力」である。その中の新任の保育士の段階には、実践をその場限りの具体的なこととして捉えられず、自分自身の過去の経験や価値判断のみで対処することが多く、子どもの発達からその行為の意味やつながりをみることができない。また、ある状況で起きた行動の原因や生起の過程をいろいろな視点から説明したり、そこから対処の方法を構成的に考えていくような保育もできない。更に、自分の実経験から、先輩の助言に抵抗しようとすることもあり、経験を重視し、子どもと関わるのに本で学ぶ必要などないと考えたり、また本を読んでもそれを実際に保育に応用することが困難である、と言ったことを挙げている。⁴⁾新人保育士は上記のようなことに気づけず、自分の考えを中心に保育を行なっていることが述べられている。つまり、新人保育士は先輩保育士の助言に抵抗している訳ではなく、新人保育士には保育園での一日を子どもの育ちの意味を考えながら保育をしていく余裕がないことが推察できる。新人保育士はクラス担任の責務として、自分のクラスの子どもの援助をし、成長発達させなければならないと考えていると思われる。

寺島(2009)によると、保育士の保育内容の具体的な活動として、保育園の行事活動(恒例・儀式・催し物など)があり、保育士はそれらを保育の中心に据えながら進めている。しかし、新人保育士はこの活動をこなすことに一生懸命で、そこで子どもの育

ちの意味を考えながら保育を進めていくことは難しいのである。⁵⁾

さらに堂本(2005)は、保育の資質について保育時間中の保育士の見取りの重要性も上げている。保育士は保育を行なっていくときの保育時間中は、絶え間ない子どもの要求やアクシデントに対応しなければならない、時間は失われやすく特に新人保育士はその傾向が強いだろうと述べている。保育における全ての時間は何らかのねらいに基づいた時間であることを考えたとき、目の前の事柄に対応する判断は、常にそのねらいに変えることができるものでなくてはならない。つまり、時間に配慮しながら保育をしていくことは、子どもたちにとって大切なことである。それは、子どもたちに活躍を提供していくときに、子どもが集中できる時間には限度があり、それに従いながら行うことで、子どもたちに育てたいねらいが達成できるようにする保育が重要であると言えよう。このように新任保育士は、保育を行なうのに必要な保育時間の重要性の気づきも持たず、一日の保育を保育士の直感による保育方法だけで行なっていることが伺える。⁶⁾

導寺(2004)は、保育士の保育の方法として、「関信三の保育観」を上げて論じている。それは「目に見えるものを負うのではなく、心的情緒の成長発達を目指す保育であった」⁶⁾という。しかし、新人保育は「関真蔵の保育観」とは逆で、目に見えるものを負い、心的情緒の成長発達を目指すことはできない保育を行ってしまうと思われる。保育園での保育は子どもがそこにいて歴然と流れているが、子どもの心的情緒の成長発達を見取る余裕がないのが新人保育士であると考ええる。子どもたちの表現方法は、ベテランの保育士と新任保育士の保育の違いにより、子ども本来の特質性まで変えて表現するとは考えられない。つまり、上記でも述べたように、新人保育士は、このようなベテラン保育士が当たり前に持っている保育観はまだ持っておらず、自分の直感で子どもとかかわり合っているであろう。⁷⁾

このことに関連して、西垣(2007)らは、新人保育士の保育の質を高めることと援助の関連性について以下のように述べている。保育士は保育を行なっていくときに、子どもの「今」にどのように向き合うかという観点を持つことで、保育そのものの質が深くなるとも考えている。このように言うもののこのように保育活動の「今」についても気をつけながら行なうことはできないのが新人保育士であると考えていることができる。

また、保育園のクラス編成において同年齢で複数クラスが存在している場合は、一斉活動のように子ども側の継続性が見えにくい活動を保育に取り入

れる際には、学年の保育士間で念入りに共有の理解を図りながら、何を目的として行なう活動であるのかについて事前の打ち合わせや、自身の活動への納得が必要になる。しかし、新人保育士は、時として活動を成立させることに捕らわれ、その活動の子どもにとっての「今」の意味に気持ちを向けられなくなると述べている。保育士がそれを実行できるようになるのには、事前に子どもの実態をより丁寧につかみ、活動中の「今」の子どもの姿に対して、前もって捉えた実態を関連づけながら子どもの全体像を解釈する観点を持つ必要がある。つまり、新人保育士は決められた活動の「今」に対して、活動の意味を理解することはなく、活動が成立することのみに気持ちが向かったり、予想される子どもの姿も、経験不足から自身の思いに縛られた結果、子どもの視点に立った解釈ができず適切な援助ができなくなる。⁸⁾ 子どもに合った援助方法として、小原(2005)らは、子どもがイメージの中に入り遊ぶことが好きであることを利用して、それに合った保育の展開をした新人保育士の研究を行っている。子どもがイメージできないときには、保育士が省察をして、何が不足していたのかを考え、もっと子どもと共感したいという思いを、次の保育に繋げるようにしていた。テーマについては、運動会でリズム遊びを真面目にすることもいいが、身体表現遊びのような身体を動かして遊ぶことから始まることによって意欲も表情も違い楽しむことができる。そこで、他の活動と身体表現を組み合わせることを試み、子どもと共に楽しさを共感する。以上の理由で、子どもたちに身体表現を中心にした保育を展開すると、保育は効果的であることが報告されている。⁹⁾

また、石塚(2005)は、保育歴1年目の保育士は、保護者との関係性を肌で感じ、助言できるようになっている。また、連絡帳の工夫は10年目以上のベテラン保育士と差がなくできているのである。連絡帳に書いて伝えるという援助は、毎日の連絡事項や子どもの状況等を書く項目が決められている紙面上のコミュニケーションで、連続性、安定性があるために安心してその援助を行うことができていると論じている。¹⁰⁾確かにA保育士も保育日誌や連絡帳などは几帳面に記載されていることを研究会のときに話してくれた。

そのことについて、新人保育士はポートフォリオを作成することで保育の質が上がることを、飯野・七木田(2004)は推奨している。ポートフォリオの利点は、振り返りの定着化と、振り返りにおける視点の育成と、振り返りにおける視点の広がりを行うことである。¹¹⁾

同様に、寺島(2009)らは、学生は学校で多くのレ

ポート課題や実習園での記録や指導案の作成を行うことで、力をつけて現場で活躍する1つの力になっていることを明確にしている。¹²⁾

保育所保育指針の改定の理由の中にもあるが、保育を行うときには2つの評価をしながら保育を進めていくことが重要である。その1つ目は、子どもたち自身のそのままの状態の評価であり、2つ目は、保育計画を立て保育をした保育士自身の評価である。¹³⁾ その評価の仕方は、ポートフォリオの作成と同じように記録を積み重ね、それを分析しつつ展開していくことは大切である。記録は、客観的に保育を見取ることができる方法の1つであり、効果が期待されている。

2. 目的

上記で、新人保育士における子どもへのかかわりと援助に関することについて考えてきた。そこで、本研究では、保育士の養成課程を卒業し、保育士の職を得た卒業生の3年目の保育士に焦点を絞り、新人保育士が保育をしていく経過を検討していく。どのような経過で保育の専門職者に育っていくのかを記述することで、新人保育士における保育のあり方を明らかにしようと試みる。

3. 方法

本研究では、本校短期大学を卒業して保育暦が3年目で、初めて3歳児のクラス担任になり1年目の保育士Aからの情報を元に行なった。A保育士は、保育士養成校を卒業し、未満児保育の担当として複数担任(4対20)となり、子どもへのかかわり方と保育園の組織に慣れることを目標にスタートした。その後クラス担任へと移行し、本研究のA保育士は初めてクラスの主任担任になった。つまり、保育士として就職した3年目の保育士である。クラスの子どもの人数は男5人女9人の計14人であった。

A保育士に対して、月1回1週目の水曜日に2時間面接を行った。面接は、4月～3月まで、9、11、2月を除き9回行われた。面接時には、①月ごとのクラスの様子、②クラスにおける気になること、③クラスでよくする子どもの遊び、④クラスにおけるかかわりの多い友達・少ない友だち、⑤クラスのぶつかる友だち、⑥クラスにおける遊びの中での役割、⑦クラスの来月に向けての保育士の願いの7点について訪ねた。また、今回は用いないが、面接時に、SD法と社会的コンピテンス尺度法を用い、クラスの特徴を評価してもらった。面接にはカンファレンス的な面もあり、質問用紙の記入後、日々の子どもの様子や悩みや保育方法についても話し合った。さらに、月1回、保育場面ボイスレコーダーに記録してもらい、

保育の様子についての把握に努めた。これらの情報収集については、保育園の園長および保育士には了解をとり、その管理には最善を尽くした。

4. 結果及び考察

(1) 月ごとのクラスの様子

A保育士のコメントのうち、「月ごとのクラスの様子」を整理したのがTable.1である。

A保育士は3歳児の担任をする以前に2歳児を担当しており、「4月のこれまでの様子」では、「身の回りの始末の仕方を覚え、生活の流れを知り、保育士の指示がなくても自ら行なうことができるようになってきた」と1番目に記載している。このことはA保育士が2歳児の担任をしていた時に、1番気にしていたことであると考えられる。また、金魚の餌あげ当番表作りにおいても、2歳児の時の様子を見取り、この活動はできると考えて、子どもたちの活動の1つとして行っていた。5月でもお当番が同じように金魚に餌上げをし、楽しんでいることを見取っている。しかし、5月以降に金魚の餌あげの活動については、述べていない。

着脱において5月の時点では、少しずつ着脱ができるようになって欲しいと子どもの様子を見取っており、6月では、衣服の着脱では個人差が大きいが、表裏を意識したり、自分でやろうと頑張る姿がみられると成長を見取り、さらに8月では、衣服の着替えをする機会が増え、ほとんど自分でできるようになり着脱の自立を確認している。

子ども同士の遊びについて、A保育士は4月の時点で、パズルや積み木を友達と交代でやり一緒に完成させて遊び、5月には季節の変化と共に、泥や水を使った遊びをし、6月には泥に抵抗がなく遊びこめる子と服が汚れることも嫌いな子がいる、という一人ひとりの子どもの違いを見取っている。

また、8月には子どもたちだけの集団遊びが見られたとあり、子どもたちの3歳児としての発達段階を述べている。1月にはお家ごっこが広がり、カーテンをつけたり、机に風呂敷を敷いてパーティをやり始める。また引きゴマが全員できるようになったり、5人でカルタをやったり、雪遊びを楽しむことをしている。さらに、A保育士は担任をして12ヶ月目には、集団遊びをする時間があればクラス全員するなど、1年間の確かな成長ができたことを確認することができた。

更にA保育士は、3歳児のクラスが3クラスあるので、園全体の行事活動と同年齢活動を中心に保育をしていた。それは運動会で、身体表現・かけっこ・競技などについて楽しく行うことができるようになった。また、4月には進級して4歳児になるので、不

安がないように同年齢の子どもとの交流会活動をしたり、自分たちの使った保育室やおもちゃや棚などの拭き掃除をし、使った部屋に感謝をしつつ進級していく喜びを育てていることが伺えた。

このように全体の月ごとのクラスの様子を見ると、A保育士は3歳児の担任をする以前に2歳児を担当していたため、子どもたちへの支援方法を迷うことなく、子どもたちのできそうな「金魚の餌あげ」の活動を行った。そして基本的生活習慣の「着脱」に注目したり、子どもの好きな遊びをさせながら、園全体の行事活動と同年齢活動を中心に保育をしていたことが伺えた。

(2) クラスにおける気になること

A保育士のコメントのうち、「子どもの気になること」を整理したのがTable.2である。4月には新しいクラスになり子どもたちは慣れず、午睡開始の一日目は眠れなかったり、不安定になり遊びの中に入りたが入れずにいる子どももいた。5月には少し慣れてきたのか、見ていない所でイタズラをしだす子どももでてきた。6月には保育士が子どもたちに集まるように伝えるが、集まれなかったり、おしっこを漏らしながら遊んでいる子どもも出てきた。また、食事中にはお喋りが多くなってきた。8月には保育園に慣れてきたのか片付けができなくなってきた。10月になり、友達の姿は行動に目を付くようで「○○しちゃいけないんだよ」などの注意が多く、トラブルが増えた。

子どもたちは4月に入園し6ヶ月経ち、4歳児になった子どもたちが多くなり、自己主張もたくさん出てきたことが伺えた。

12月になり、以前は異年齢のクラスに会食に行くことができていた子どもが泣くようになったり、口げんかになったり、園では元気はいいが登園を渋る子どもがでてきている。1月には、子どもの状態の差がでてきた。例えば食事中のおしゃべりが多かったり、「できないできない」と嘆いたり、何も言わず最後まで頑張れたり、身の回りの始末ができずにいるなどである。3月ではクラスの交流会で他のクラスの保育士に声を掛けられると不安定になり、なかなか担任と離れられない子どもがいたり、自分のことより人のことに耳が向き、集中して身の回りの始末ができない子がいる。また、集団遊びに入れないうちや自由遊び中一人遊びが多い子どももいた。

このように「子どもたちの気になること」について見てみると、A保育士は生活習慣や遊びにおいて、子どもたちはA保育士の願いに反し、行動していることが述べられている。また、A保育士は「食事中のおしゃべりが多い」ことも挙げている。しかし、A保

Table 1. 月ごとのクラスの様子

4月	5月	6月	8月
身の回りの始末の仕方を覚え、生活の流れを知り、少しずつ言われなくても自分たちでする姿が見られるようになってきた。	少しずつ着脱ができるようになって欲しい。	泥に抵抗がなく遊びこめる子と服が汚れることも嫌いな子がいる。	子どもたちだけの集団遊びが見られた。
金魚の当番表を作り、2人ずつ餌をあげて飼っている。	忘れてしまうものもあるが「〇〇出して」と言われなくても支度ができるようになってきている。	衣服の着脱では個人差が大きい表裏を意識したり自分でやろうと頑張る姿が見られる。	片付けができない。
パズルや積み木などを友達と交代でやり、一緒に完成させて喜ぶ。	泥や、水を使った遊びが始まる		一人転園し、ゆとりができた(14名→13名)
	金魚やカニのえさやりを当番で喜んでいます。		お当番が給食前などの挨拶をするようになる。→照れつつ楽しみながら人前で話す。
	お手伝いが好き(ワゴン・台拭きなど)		衣服の着脱をする機会が増え、ほとんど自分でできるようになる。(表裏に気づいて直す、脱いだら畳む)
			お手伝いが大好き。
10月	12月	1月	3月
運動会に向けてクラスで一つのものに取り組んだり、1・2・3組一緒に表現やかけっこなどを楽しむ。抵抗なく異年齢の子ども競技に参加する。	お店屋さんごっこを通し、ごっこ遊びが広がってきた。テーブルに風呂敷を敷いて雰囲気を出したり、イスや机を並べ好きな友達とイメージを共有しながら遊んでいる。その反面口喧嘩が増えた。	うがい、手洗いが習慣になり、自分たちでできたり、友だちに教える姿がみられる。	進級に向けて他のクラスで生活をする。3クラス編成だが、一緒にし、2クラスで過ごす。
	祖父母参観日やクリスマス会に向けて、皆で歌やダンスを楽しむ。	おうちごっこが広がり、カーテンをつけたり、机に風呂敷を敷いてパーティをしたりし始める。	卒業式の総練習に参加する(全員初めて)
		引きゴマが全員できるようになる。カルタを5人でやり、楽しんだり、雪あそびを楽しむ。	進級に向けて使った物(おもちゃや棚など)の拭き掃除を皆でする。
		食事の量が増え、一定量食べ、箸の使い方も上手になり自分で集められる。	室内、戸外、少しの時間でもクラス全員で集団遊びを必ずする。

育士は、3歳児を担当して一生懸命に保育をしようとしている姿勢は推察されるが、3歳児の発達段階を理解して保育をしているわけではないことが伺えた。

(3) クラスでよくする子どもの遊び

A保育士のコメントのうち、「子どものよくする遊び」を整理したのがTable.3である。4月の遊びは「パズル・ままごと・積み木」であった。この中のパズルは5・6・8月と行っており、子どもたちはパズルが好きであることが伺えた。5月には出現してくる粘土は、可塑性にとんだ子どもたちの好む教材として大切に準備されているものであるが、1回のみで他

の月には出てきていない。6・8月の戸外・泥んこ・色水・プールなどの遊びは、夏の季節に合った遊びである。また、1月のカルタ・こま遊びも冬の遊びで日本古来の伝承遊びである。これらの遊びは、A保育士が考案したのではなく、ベテラン保育士が子どもたちに合った、季節の遊びや日本古来の伝承遊びを保育の中に取り入れることで、子どもたちを成長発達させていこうと願う意図が伺えた。10月の遊びを見ると、ぬりえをやりだしているが、上手にぬれることはなくはみ出して塗っていることが多く、3歳児の発達の過程であることが伺えた。その芽は1月にも出現してきており、子どもたちは描いて行きたい衝動に駆られていると思われる。それに対して

Table 2. クラスにおける気になること

4月	5月	6月	8月
3歳で入園し、初めてのお昼寝を寝つくのが遅い又は寝ない。一人の子は、プレッシャーになると目をこすったり余計に動く。	見ている所でイタズラをしたりはめをはずす	「おいで」「集まれー」と言っても全員集まらない。	泥んこ遊びで泥が触れない子がいる。
一人で寝れるし、よく遊ぶがふと泣いたり、「寝ない」と言い張る子が1人いる。	頑張りすぎてしまう子どもがいる。	おしっこが出ても言わないで遊んでいる。(行ったとうそをつく)	片付けができなくなってきた。
仲良しの子ができてきて、そこに入りたいが入れずにいる子もいる。		食事中のおしゃべりが多い。	
10月	12月	1月	3月
友達の姿は行動に目が付くようで「〇〇しちゃいけないんだよ」などの注意が多く、トラブルが増えたように思う。	異年齢や他クラスに会食にいけない子が泣くようになった。	食事中のおしゃべりが多い。	他の部屋、保育士に不安定になり、なかなか担任と離れられない子がいる。
Yちゃんは自分のしたいことが一日の生活の流れ(時間)でできず、ごさや敷きやワゴンに行けずおお泣きする子がいる。友達が手伝って使用としてくれていることも気に入らず「〇〇ちゃんがやっちゃった」など、マイナスのなってしまう。	きつく言っているつもりはないが、言われた方は傷ついたらしくよく口喧嘩になったりする。	「できない、できない」と嘆く子と何も言わず、最後まで頑張る子との差が出てきた。	自分のことより人のことに目が向き、集中して身の回りの始末ができない子がいる。
	園ではとっても楽しく過しているが、登園を渋る。	身の回りの始末が直ぐできずにいる子がいる。	集団遊びに入れない子、自由遊び中一人遊びが多い子がいる。

A保育士の環境設定は、子どもたちが色塗りをしたくなるように、紙を準備しておいたことが伺われた。また、10月には段ボールという素材を子どもたちに提供して、電車やジェットコースターを作り遊んでいることを見取っている。3月にはA保育士が、「あぶくたった」や「なべなべ」などの集団遊びを考案し、子どもたちと一緒に遊んでいることが伺えた。このことは、A保育士は、子どもたちが皆で1つの遊びを共有することができるのかと思う焦りから提供してみたところ、できたことにほっとしたことを聞き取りのときに述べていた。

このように、A保育士は、入園当初に子どもたちが遊び出せると考えられる玩具(パズル・ままごと

セット・積み木・粘土・ブロック)を物的環境の1つとして準備し、保育を展開しようとしていることが伺えた。6月には、季節に合った遊びの物的環境を戸外・泥・色水・プールに移行させつつ保育室の中にあるパズル・ままごとセットを準備し、遊ばせながら成長発達させていこうとしていたことが伺えた。10月には、A保育士は段ボールを素材として提供してみている。これは、短大在学時にゼミ活動で学んだ教材の提供の仕方を実践しているものである。すると、子どもたちは電車やジェットコースターを作り遊ぶことができた。このことに関して、Table 2. では、10月に、自分以外の友だちの所に目が向いてきてトラブルが増えてきたと述べている。

Table 3. クラスでよくする子どもの遊び

4月	5月	6月	8月
パズル	粘土	室内 パズル・ままごと	ブロックで剣や車、銃作り
ままごと	積み木(高く積んで)	戸外 泥んこ・色水・プール	ままごとごっこでチェーンやひもを通して使って料理作り
積み木	ブロック		パズル・プール・泥んこ・色水
	パズル		
10月	12月	1月	3月
ぬりえ→色分けしている子とグチャグチャ塗る子という	ままごとごっこ→女の子が主とK男(犬や猫になる子とお母さん役になる子がいる。)	ブロック(戦いごっこ)	あぶくたった
ブロックで剣や飛行機、車作り、プリキュアのケーキやステックなど	ブロック→男の子が主で剣や銃を作って戦いごっこをしたり、女の子のプリキュアと協力して見えない敵をやっつける。コマを作る。	ぬりえ・お絵かき	なべなべ
ダンボール→電車やドアの所でジェットコースター遊び		お家ごっこ(ままごとごっこ)	積み木
		カルタ	ドミノ
		こま	ままごとごっこ お絵かき、平仮名を書いて勉強ごっこ 戦いごっこ

ブロックは5月に出現し、8・10・12・1月と遊ばれており、ブロックで遊ぶものを自分で作るという保育を展開していることが伺えた。子どもたちは友だちと一緒に、戦いごっこに使うものを作って遊びたいと思い作っていることが伺えた。このことは、月ごとのクラスの様子の項目の3月にも、「集団遊びができるようになってきた子どももいる」とあるが、このような遊びに該当する子どもたちが、ここに入ることが述べられていた。

ままごとごっこは8・12・1・3月に述べられており、ままごとごっこは3歳児にとっても大切な遊びであることが述べられていた。8月では、ままごとごっこをするのにチェーンやひもを工夫して料理を作り遊ぶことをし、12月では、友だちと一緒に犬や猫やお母さんになるという役割分担が出現してきていた。さらに1月にはお家ごっこをすることが述べられており、子どもたちの集団としての高まりが構築されてきたことが伺えた。積み木も、4・5・3月と遊ばれており、年間を通して遊ばれる遊具であることが伺えた。

このように、子どもの1年間の子どものよくする遊びを見てくると、A保育士は子どもたちに遊んでほしいことを願い、玩具を設定していることが推測された。

(4) クラスにおけるかかわりの多い友だち(4・5月)とクラスにおけるかかわりの少ない友だち(6・10・12・1・3月)

クラス担任保育士のコメントのうち、「子どものかかわりの多い友だち」「子どものかかわりの少ない友だち」を整理したのがTable 4である。

本研究の項目では、「かかわりの多い友だち」で述べるようにしていたが、6月以降は「かかわりの少ない友だち」に変えて答えていた。これは、4・5月にお

いて子どもたちのほとんどがかかわって遊んでいたので、A保育士は、「かかわりの多い友だち」のところに視点を置くことはせずに、「かかわりの少ないお友だち」に視点を置くことでクラスの様子が理解し易いと思ったことが伺えた。

つまり、4月と5月においてほとんどの子どもたち同士が、かかわりながら遊び出している事を述べており、子どもたちの見取りを考えたときには、その逆からつまり「かかわりの少ない友だち」から考えることで、利点があると考えたからであろう。

Y子は、4月では、YU子・S男・SR男・M男とかかわっており、5月では、S子とかかわっていた。しかし、6・10・12・1・3月においては、「かかわれない友だち」の項目で、全ての月に述べられていた。12・1・3月では、A保育士は、Y子一人だけがかかわれない友だちとして述べられていた。

また、Y子は(5)「ぶつかる友だち」の項目の中で、5月では、「K男とY子」、6月では、「Y子とS子」、10月では、「SR男とY子とS子」のぶつかり合うことが述べられている。

このことから、Y子は、4・5月は、友だちとたくさんかかわり遊んでいたが、6月以降はY子なりの考えがあり行動していたようである。しかし、(4)「かかわりの少ない友だち」(Table 4)の6・10・12・1・3月で述べられているように、Y子は友だちとのかかわりをすればぶつかってしまうので一人で遊んでいることが伺えた。Y子にはY子なりのルールをもって遊びに参入していると思われるが、その思いがA保育士にも子どもたちにも通じず、10月では、SR男やS子が、Y子を手伝おうとしてトラブルになっていることが述べられている(Table 5)。このことにおいて、A保育士は、Y子にはY子なりの考え方があるので、それを大切にしながら、支援していかなくてはならないのではないだろうかと思われる。

Table 4. クラスにおけるかかわりの多い友だち・少ない友だち

かかわりの多い友達		かかわりの少ない友達				
4月	5月	6月	10月	12月	1月	3月
①R子・S子	①R子・S子・M男	①T男	①Y子	①Y子	①Y子	①Y子
②HY男・HU男・T子	②SR男・YU子	②K男	②M男			
③S子・K子	③K男・HR子	③Y子	③S男			
④HR子・K男	④S子・K子	③M男	④T子			
⑤YU子・SU男・Y子・ SR男・M男	⑤T子・S子					
	⑥HY男・HU男 (T子)					
	⑦S子・Y子					
	⑧Y子・HY男					
	⑨S子・R子・K子					

Table 5. クラスのぶつかる友だち

4月	5月	6月	
①S子・K子	①K男・HR子	①SR子・HR子	
②S子・K男	②K子・Y子	②Y子・S子	
③HR子・K男	③S子・K子		
	④SR男・HR子		
10月	12月	1月	3月
①SR男・Y子・S子→Y子を手伝おうとして、トラブルになる。	①S子・K子	①SR男・HR子	①S男・HR子
②K男・SR男→なかなか一緒にできず「僕が、僕が」で喧嘩になる。	②SR男・HR子	②K男・HR子	②K男・S子
③YU子・K子→K子が強くYU子のしていることを注意し、いやな思いをする。	③HY男・K男	喧嘩、ぶつかり合いは減ってきている。	

※10月のみ理由を述べたので、提示した。

6月ではT子・K男・M男が、10月ではM男・S男・T男が友だちとかかわれないことを述べている。この中でK男は、(5)「ぶつかるお友達」(Table 5)でも、4・5・10・12・1・2・3月で述べられており、友だちとのぶつかり合いも友だちとかかわれないことに繋がっていると思われる。しかし、T男やM男やS男は、ぶつかるお友だちの項目(Table 5)には該当せず、かわりが少ないお友だちに該当している。

このように、子どもたちの全体のかかわりを見ると、(4)「かわりの少ないお友だち」(Table 4)と(5)「ぶつかるお友だち」(Table 5)の項目においての関係は、Y子やK男のように「かわりの多いお友だちとかかわりの少ないお友だち」の両方の関係性が認められて行動として現れて来る者と、T男やM男やSO男のように友だちとかかわるのが少ないだけで、ぶつかり合うこともしない者もいることが伺えた。

(5) クラスでぶつかる友だち

A保育士のコメントのうち、「クラスでぶつかる友だち」を整理したのがTable.5である。A保育士は、この項目では、4・5・6・10・12・1・3月の7月間で報告をしている。4月では、「S子・K子」・「S子・K男」・「HR子・K男」の3組を示した。K男はS子とHR男ともぶつかっていることを指摘している。5月では、「S子・K子」・「HR子・K男」・「K男・Y子」・「SR男・HR子」の4組を報告している。K男は4月に引き続いて5月も、HR男・Y子」などとぶつかっていることが報告され

ている。また、「HR男・K男」と「SR男」とぶつかっていることも報告されている。6月では、「SR男・HR子」が5月に引き続いて報告されている。「Y子・S子」も6月になって報告されている。10月では、「SR男・Y子・S子」は「Y子」を手伝おうとして、トラブルになっている。「K男・SR男」は、一緒にやることができず「僕が、僕が」で喧嘩になる。「YU子・K子」は「K子」が強く「YU子」のやっていることを注意し、いやな思いをしている。12月では、「S子・K子」・「SR男・HR子」・「HY男・K男」の3組が報告されている。「S子・K子」は4月でもぶつかる友だちとして報告されていた。「SR男・HR子」は、5・6・12・1・2・3月でぶつかるお友だちとして報告されている。1月では、「SR男・HR子」・「K男・HR子」と2組報告されているが、喧嘩のぶつかり合いは減ってきていることを報告している。3月では、「ER男・HR子」・「K男・S子」の2組が報告されていた。

このことから、クラスの子どもの中でも、「ぶつかる友だち」として挙げられる子どもはある程度限定されていることがわかる。登場するのは、S子・K子・K男・SR男・HR子・Y子・YU子・HY男の8名であり、クラスの人数の半数程度である。子どもによって気の合う子どもと、気の合わない子どもがいたり、4月の入園時では、誰とでもかかわろうとしていたのに、その後は誰ともかかわらず一人ぼっちで遊ぶ子どももいたことが伺えた。

(6) クラスにおける遊びの中での役割

A保育士のコメントのうち、「子どもの遊びの中

での役割」を整理したのがTable.6である。

A保育士は、この項目では、4・5・6・8・3月の5月間の報告をしている。

横断的に追うと、4月には「ままごとごっこ」でお医者さんと患者になる。「戦いごっこ」では、自分の好きなレンジャーとプリキュアになり、「お化け」を倒す。5月には、遊びの中でY子の面倒を友だちがみる。「動物ごっこ」で、犬になりきり皆で遊ぶ。「買い物ごっこ」でお母さんになってする。6月には、「動物ごっこ」で、犬や猫になって遊ぶ。また4月にやっていた「お医者さんごっこ」で「患者さん」にもなり遊ぶ。さらに、4月にやっていた「プリキュア」になり遊んでいた。

8月には、4・6月でやっていた「お医者さんごっこ」で「患者さん」にもなり遊ぶ。遊びが展開して来たの

かピクニック遊びで「お父さん」「お母さん」「子ども」になって遊ぶ姿があった。

3月には、「ままごとごっこ」で、男の子は「お父さん」「お兄さん」、女の子は「お母さん」役が主で、全体的には猫役が多く見られた。「戦いごっこ」では自分の好きなキャラクターになって変身して遊んでいる。また、新しい遊びを提案できたり、面白そうなことをしてくれる友だちについていく子ができた。

このようにA保育士は遊びの中での役割を見てきたが、子どもは「お医者さんごっこ」は、4・6・8月で行ない、「テレビのヒーローごっこ」には4・6・3月で行ない、「ままごとごっこ」は、5・8・3月で行ない、「動物ごっこ」は5・6月で行っていた。また、良く遊ぶ面白いことを知っている友だちについて遊んだりする子どももいたことが伺えた。

Table 6クラスにおける遊びの中での役割

4月	5月	6月	8月	3月
ままごと→お医者さんごっこでは寝る患者さんと診るお医者さん・全員で猫になる	Y子の面倒を友だちが見てくれる。	犬や猫になってみんなで遊ぶ。	お医者さんごっこ→患者さんとお医者さん	遊びの提案をし、「違う遊び」「あそぶ力をもっている」など自分の遊びを展開する子についていく子がいる。
ブロック→戦いごっこ(自分好きなレンジャーやプリキュアになる)一緒に想像した敵を倒したり、Kくんがお化け役になる。	犬になると皆「ワンワン」と犬になる状態	お医者さんと患者さんごっこ	ピクニック→お母さん(お父さん)と子ども	ままごとごっこ→男お父さん、お兄さん役・女→お母さん役が主・猫役も多い
	「買い物に行きます」と言いお母さんになって買い物ごっこをする。	プリキュアごっこ(それぞれの役になる)		
		ヒーローごっこ		戦いごっこ→好きなキャラクターになり変身して遊ぶ。

(7)クラスにおける来月に向けての保育者の願い

ここでは、来月に向けての、A保育士のクラスに対する願いを整理した。それを示したのがTable.7である。

4月には、朝や帰りの会で、子どもたちができそうな出席の取り方や、当番の活動などもするように願っていた。このときA保育士は、この園に異動になり2歳児を1年担当しており知っている子どももいることから、子どもとの信頼関係を構築することに願いを持っておらず、子どもの活動ができることに

願いが向かっていることが伺えた。5月には、4月に述べられた、「泥遊びをすることを願う」ことを受け継ぎながら、汚れを気にせずに泥遊びを楽しんで欲しいことを述べていた。このことは、夏の季節の6月、8月においても同じことを願っていた。つまりA保育士は、季節に合わせた保育活動をしようとしていることが伺えた。さらにA保育士は、子どもがままごとごっこが好きであることを知っており、ままごとごっこの環境設定を意図的にして、ままごとごっこをさせようとしていることが伺えた。その根拠と

して、4月にままごとごっこでお医者さんごっこをしていることを見取り (Table 6), ごっこ遊びが子どもたちにとって大切なことを知り、環境構成をしたことが伺えた。そして、ごっこ遊びは、このクラスが4歳児クラスに進級する3月まで続くことになった。6月には、A保育士は、子どもたちに対して怒らず子どものそのまを受け入れて、子どもを信じて保育をするようにしていた。さらに、次の活動である運

動会の活動に向けてリズム遊びや絵本でイメージを持たせるようにしようと、自分がやらなくてはならない活動を願いの中に述べていた。A保育士は、子どもの成長発達を願う前に、自分がやらなくてはならない保育活動に願いが向っていることが述べられていた。同様に、8月にも運動会での願いが述べられていた。また8月には、基本的生活習慣で身の回りの始末の遅い子には早くなって欲しいことも願

Table 7. クラスの来月に向けての保育士の願い

4月	5月	6月	8月
帰りや朝の会など、時間があるときにできる。	汚れを気にせず泥遊びを楽しんで欲しい。	怒らずマイペースに子どもを受け入れ、信じて保育する。	身の回りの始末の遅い子が少しスムーズになったり自分からして欲しい。
簡単な集団遊びを取り入れていく。	環境を工夫してままごとごっこなどのごっこ遊びもして欲しい。	泥や水にたくさん触れて、夏の遊びを楽しくして欲しい。	泥んこ、プールをダイナミックにしてほしい。
夏に向けて泥遊びをしていく。		運動会に向けてリズム遊びや絵本でイメージを持たせていく。	ダンスや歌など曲に合わせて体を動かしたり、集団遊びを取り入れていく。
当番や手伝いなど、楽しみながらできることをお願いしていく。			
10月	12月	1月	3月
友だちとごっこ遊びができるようにして行きたい。	正月遊びを通して順番やルールを守って、みんなで遊ぶ楽しさを感じて欲しい。	劇遊びをし、参観日に向けてみんなで取り組んでいく。	3クラスが2クラスになるため、人数が増えるが一人が安定して過せるようにしていく。
(ごっこ遊びの中で指先が発達できるよう考えて工夫する。)	クリスマスの飾りを作ったり、行事に参加して異年齢の友だちと仲良くなり楽しんで欲しい。	お正月遊びを通し、皆で遊ぶ楽しさを伝えながら、カルタやこまなど、苦手なことやりなれていないこといにも意欲的にやれるようにしたい。	新しい保育室、新しい生活の仕方を分かりやすく、丁寧に教え、少しずつ身につけていくようにする。
芋ほりや散歩で土、どんぐり、木の実、虫に興味を持ってほしい。	歌やダンスを自分から楽しんで取り組んで欲しい。	頑張る姿を大切にしていこう。	
		来年に向けて(2歳児)あひる組と(4歳)ひばり組と交流していく。(まだ担任から離れたり、違うクラスに行くことへの抵抗を示す子がいるので、交流する機会を大切にしながら、交流を楽しめるようにしていきたい。)	

っていることが述べられていた。このことは入園して6ヶ月が過ぎたが、身についていない子どもたちへの願いが込められていた。10月には、余裕がでてきたのか、子どもたちが遊びながら育っていくことを大切にしながら、ごっこ遊びを推奨しつつ、ごっこ遊びの中で指先が発達できるような教材を工夫しようとしていることが述べられていた。また、季節に合った活動で、芋ほりや散歩に行ってどんぐり、木の実、虫に興味を持って欲しいことを願っていた。12月には、行事活動であるクリスマス会や、正月遊びにおいて自分から積極的に異年齢児にかかわったり、活動の中で歌やダンスを楽しんで取り組んで欲しいことを願っていた。1月では、劇遊びをし、参観日に向けて皆で取り組んでいくようにする。更に、お正月遊びを通し、皆で遊ぶ楽しさを伝えながら、カルタやこまなど苦手のことややり慣れないことも意欲的にやれるようにしたい、張れることを大切にしたい、来年に向かいクラス替えを3クラスから2クラスにするので、他のクラスの子どもたちと保育士に慣れるように交流会の機会を作り楽しむようにするなど、様々なことが述べられていた。3月では、3クラスが2クラスになるため、1クラスの人数が増えるが、一人でも安定して過せるようにしていく。また、新しい保育室や新しい生活の仕方を分かりやすく、丁寧に教え、少しずつ身につくようにすることが述べられていた。

このように、来月に向けての願いを概観すると、A保育士は、クラスの子どもたちに対する願いとして、楽しく遊んでほしいと願いつつ、全保育園の行事活動と同年齢クラス保育活動を中心に行っていることが伺えた。

5. 全体の考察

本研究で対象となったA保育士は、3歳児のクラス担任である。そして、子どもたちとは顔なじみである。2歳児の時に担任していたので、クラス全体の半数はその時の子どもたちである。保育園での保育内容も理解し、同年齢の3クラスと活動と一緒にいる自分なりに相違・工夫しながら保育を行なっていることが研究記録や、聞き取りから伺うことができた。

A保育士は、自分のクラスの保育を行なっているが、ただ自分の考えだけで保育を進めていくことはしていない。クラス担任をしていくといっても、保育園には同年齢のクラスが他にも3クラスあり、1週間に一度は週案の作成があり、活動など同じことをしなければならない。つまり、A保育士は、自分のクラスが所属している保育園の保育の流れや他のクラスのことも考えながら保育を行なっていること

が伺えた。

そのことは、A保育士が、4月～9月までの子どもの「月ごとのクラスの様子」から読み取ることができた。つまりA保育士は、子どもたちの様子から保育を行なっていくことよりも、保育園での活動や、子どもが自分でやらなくてはならない生活での決まりを身につけていくことに重点を置いて支援していたことが伺えた。そして、10月からは少しクラスのまとまりが見えてきたので、A保育士は、ごっこ遊びをするための環境設定を積極的にして遊ばせていた。また、行事の活動の中にも子どもに育って欲しいことが盛り込まれるようになってきた。

さらに、12月には、今のクラス担任から子どもたちと別れることを想定し、次のクラスに移った時に困らないように、配慮しながら日々保育を丁寧に支援していることが伺えた。例えば、朝の会、帰りの会、泥遊び、プール遊び、運動会、集団遊び、クリスマス会、ごっこ遊び、散歩、お正月遊び、劇遊び、3歳児クラス同士の交流会を計画し、子どもたちに保育を提供していた。このような保育内容を3歳児3クラスの保育士と相談しながら保育を進めていくことで、A保育士にとって保育の拠り所となり、自分のクラスを運営していくときにやり易い面もあったと考えるようになった。

このように、子どもたちはA保育士の行なう保育活動を受け入れながら、自ら成長していることが伺えた。これらの活動はA保育士が考案したものではなく、ベテラン保育士が中心となり考案し、A保育士をリードしながら保育を進めて行っている。その結果、子どもたちは成長発達したことが月々の記録や聞き取りの中から汲み取ることができる。このことからすると、A保育士は、子どもたちに対して、3歳児の発達段階を考慮しながら保育を行なうことより、保育士自身の思いや感じ方で保育をしていると思われた。それは「(1)月ごとのクラスの様子」の中から読み取ることができる。A保育士は、子どもにやって欲しい行事活動や、季節にあった活動を記述している。とはいうものの、発達段階を全く無視しているわけではない。子どもたちが自由保育で遊ぶときには、好きなパズルなどの物的環境としての教材を設定している。整然と並び替えることを3歳児は好むことを理解していることも伺えた。

特に、10月には段ボールという素材を子どもたちに提供して、電車やジェットコースターを作り遊んでいることを見取っている。これはA保育士が段ボールの素材で、子どもたちが創意工夫できることを学生時代に学んでおり、そのことを子どもたちに提供したことを聞き取りの中から推察することができた。

A保育士は、子どもたちが皆で1つの遊びを共有できないことに焦りを感じ提供してみたところ、できたことにほっとしたことを述べていた。子どもたちの成長発達のために集団遊びをして見ようと思うよりも、自分の保育の成果として子どもたちに試しているのである。

また、A保育士は、子どもによってそれぞれの表現の仕方が異なることに気づいている。例えば、子どもは、「お医者さんごっこ」、「テレビのヒーローごっこ」、「ままごとごっこ」、「動物ごっこ」の真似をしながら遊んでいた。A保育士は10月までクラス担任をして来ると見通しが立ち、子どもたちの育ちで育ちたりないことや、支援で不足していることを把握するようになった。そしてA保育士は、子どもたちに遊びを通して学ばせていかなければならないことが願いとして挙がってくるようになった。

しかし、1月になると、クラス内だけのことを考えて保育を行うだけでなく、進級していくクラス環境に無理なく移行できるように、他のクラスとの積極的な交流活動を設定し、実行している。A保育士は、子どもの好む遊びを提供して保育をしていこうと思いつつも、保育園の行事活動と同年齢クラスの活動を中心におきながら保育を行っていた。

このように、A保育士は、保育の中心としては、ベテラン保育士の考案した保育内容を受け入れ実践した。その保育方法は保育活動がうまく行ったとか言葉掛けがうまく行ったのではなく、A保育士が心に抱いている「子どもたちのことを大切にしている」という思いが子どもたちに伝わり、その結果A保育士と子どもたちの信頼関係が構築でき、クラス全員で集団遊びができたり、休んだ子どもたちのことを心配する思いやりの言葉が聞かれるようなクラス集団になって来たと思われる。

6. 今後の課題

保育士3年目の保育士が初めて3歳児クラス担任保育士となり、保育実践をどのようにしていきたいのかを考えてきた。今後は更にこの研究を進めて行き、4年目の保育士の保育実践を明らかにしたい。

引用文献

- 1) 全国社会福祉協議会「新 保育所保育指針を読む 解説・資料・実践」全国社会福祉協議会 2008年
- 2) 同書
- 3) 同書
- 4) 同書
- 5) 荘司紀子「保育者が育つとき—新人保育者を支える保育実践研究の事例—」日本保育学発表論文集 2009年 p 250

- 6) 導寺信子「関信三の保育観」日本保育学発表論文集 2004年 p 30・31

参考文献

- 1) 寺島明子・大野和男「自閉症を担当する2年目の保育士における子どもへの関わりと支援1」松本短期大学紀要2009年 p 83-93
- 2) 荘司紀子「保育者が育つとき—新人保育者を支える保育実践研究の事例—」日本保育学発表論文集 2009年 p 250
- 3) 望月ふみ子「支え合う関係その3—チーム力を育てる—」日本保育学発表論文集 2009年 p 578
- 4) 寒河江芳枝「保育者としての資質獲得形成の在り方」日本保育学発表論文集 2005年 p 412・413
- 5) 寺島明子・大野和男「自閉症を担当する2年目の保育士における子どもへの関わりと支援1」松本短期大学紀要2009年 p 83-93
- 6) 堂本真実子「保育者に必要な資質とは何か—一時間に対応する構えかたの分析から—」日本保育学発表論文集 2005年 p 410
- 7) 導寺信子「関信三の保育観」日本保育学発表論文集 2004年 p 30・31
- 8) 西垣直子「保育における指導・援助に関する研究Ⅱ—保育新人保育者の保育の質を高めることと指導の関連を中心に—」日本保育学発表論文集 2007年 p 1178
- 9) 小原幹代「新人保育者による『身体表現遊び』の保育実践—記録から読み取る保育者の育ち—」日本保育学発表論文集 2008年 p 596
- 10) 石塚尚美「保育士の子育て支援意識に関する研究—アル法人内保育園における保育士の意識調査より—」日本保育学発表論文集 2008年 p 597
- 11) 飯野祐樹・七木田敦「新人教育におけるポートフォリオの活動に関する研究・新任保育者の振り返りに注意して」日本保育学発表論文集 2009年 p 730
- 12) 寺島明子・大野和男「自閉症を担当する2年目の保育士における子どもへの関わりと支援1」松本短期大学紀要2009年 p 83-93
- 13) 全国社会福祉協議会「新 保育所保育指針を読む 解説・資料・実践」全国社会福祉協議会 2008年
- 14) 寺島明子・大野和男「自閉症を担当する2年目の保育士における子どもへの関わりと支援1」松本短期大学紀要2009年 p 83-93
- 15) 寺島明子「保育実習(園側)と教科科目(学校側)の評価と課題—保育園(I)と保育原理・保育内容(環境)から考える—」2008年 第44回日本教育方法学会 P139